公益社団法人
全国大学体育連合
Japanese Association of University Physical Education and Sports

The 6th Forum of The University Physical Education and Sports Studies, 2018

第6回大学体育研究フォーラム

会期：2018年3月1日（木）

会場：目白大学新宿キャンパス

MEJIRO UNIVERSITY
目白大学
MEJIRO UNIVERSITY

第 6 回大学体育研究フォーラム

目　　次

目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
主催，共催，期日，会場，実施内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
大会組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
大体連専務理事，実行委員長挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
大会日程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
会場への交通案内・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
会場案内・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
参加者へのお知らせ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
発表者へのお知らせ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
一般発表プログラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
ワークショップ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
発表抄録（事例報告，研究報告）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
「大学体育学」投稿規定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39

主催，共催，期日，会場，実施内容

【主　　催】

公益社団法人全国大学体育連合

【共　　催】

目白大学体育教育委員会

【期　　日】

2018 年 3 月 1 日（木）

【会　　場】

目白大学新宿キャンパス

（〒161-0032　東京都新宿区中落合 4-31）

【実施内容】

ワークショップ，大学体育に関する研究報告・事例報告

大会組織

全国大学体育連合専務理事　　小林勝法（文教大学）

【実行委員会組織】

実　行　委　員　長　　本間玖美子（目白大学）

実 行 委 員 次 長　　雪吹誠，浅井泰詞（目白大学）

実　　行　　委　　員

総　　務：　小林勝法（文教大学），木内敦詞（筑波大学）

会　　計：　飯田路佳（十文字学園女子大学）

発表編成：　田原亮二（名桜大学），北徹朗（武蔵野美術大学）

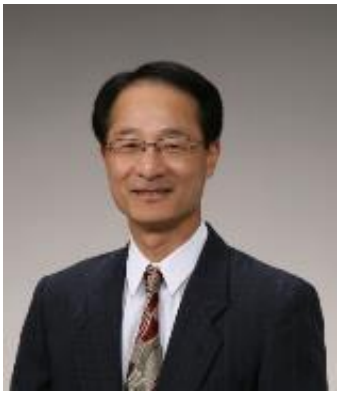
司　　会：　難波秀行（日本大学）

優 秀 賞：　小林雄志（岡山大学）

参加・発表受付，プログラム抄録集作成：　中山正剛（別府大学短期大学部）

大体連専務理事，実行委員長挨拶

全国大学体育連合専務理事　小林勝法（文教大学教授）



大学体育研究フォーラムの開催が今回で第 6 回目となり，年々充実し，発展していることをうれしく思います．第 2 期スポーツ基本計画で掲げられた「一億総スポーツ社会」や「大学スポーツ振興」の達成のため，そして，地方大学の活性化のために大学体育が貢献できることは多々あります．本フォーラムでもこれらに関した研究や授業の様々な工夫などの先進的な実践報告があり，大学体育研究の進展を感じます．ワークショップではＩＴ利用に関するもので，私も楽しみにしています．

今回は目白大学体育教育委員会が共催してくださいました．心より感謝申し上げます．また，本フォーラムの運営にあたっては，本間玖美子実行委員長をはじめ，委員の皆さまにご尽力いただき，厚く感謝します．

第 6 回大学体育研究フォーラム実行委員長　本間玖美子（目白大学人間学部教授）

目白大学にて第6回大学体育研究フォーラムが開催されますこと大変嬉しく思います．
かつて全国大学体育連合の実技講習会に何度か参加し，受講者の体験レポートを提出したことを懐かしく思い出しました．

大学体育は一般教養科目の中の体育から基礎教育科目，スポーツ・健康科目，スポーツ科学，スポーツ・健康科学など各大学での名称変更が続き，一般体育廃止，又は選択科目とするなどの大学が増えた一方で，現状は大学体育の必要性が叫ばれているのではないでしょうか．

大学体育研究フォーラムは，若手の研究者を中心に大学体育に関する優れた実践や研究内容の充実を目指し，活性化推進されていることはこれからの大学体育教育に大きな期待を寄せる要因または起爆剤となることでしょう．

今回は『大学教養体育のための「体力つくり運動アプリ」の活用ワークショップ』が実施されます．参加者の皆様がこのワークショップで実践力を培い，日頃の指導に役立てることを期待しています．

大会日程

期 日 ：2018 年 3 月 1 日（木）

会 場 ：目白大学新宿キャンパス（〒161-0032　東京都新宿区中落合 4-31）

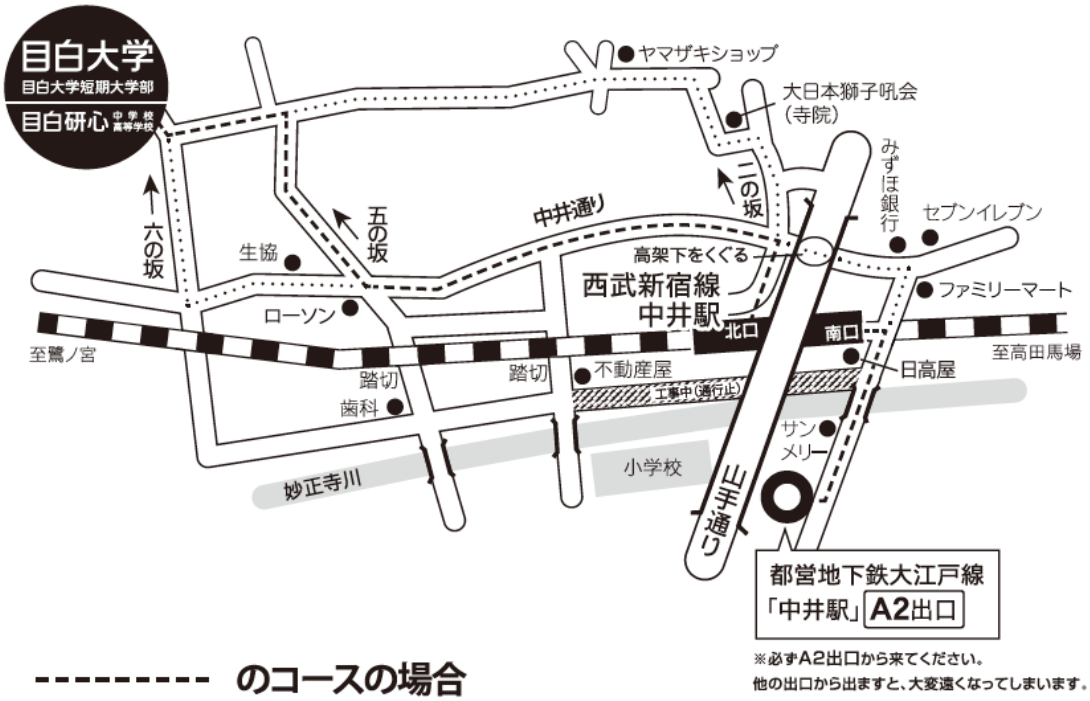
3 月 1 日（木）

時　間	プログラム	場　所
9:30～	**受付**	
10:00～10:10	**開会式・挨拶**	
10:15～11:45	**ワークショップ　佐藤　豊 氏（桐蔭横浜大学）** **「大学教養体育のための『体つくり運動アプリ』の活用ワークショップ」**	
11:45～13:00	**昼食**	
13:00～16:55	**発表：1 演題 15 分（発表 10 分質疑応答 5 分）** 事例 1-3　座長：西脇 雅人（大阪工業大学） 事例 4-7　座長：平工 志穂（東京女子大学） 事例 8-10　座長：小谷　究 （流通経済大学） 事例 11，研究 1-2 座長：藤本 敏彦（東 北 大 学）	
16:55～17:00	**フォーラム優秀賞の発表・閉会式**	

会場への交通案内

【目白大学新宿キャンパスへのアクセス】

西武新宿線「中井」、都営大江戸線「中井」駅から



※必ずA2出口から来てください。
他の出口から出ますと、大変遠くなってしまいます。

---------- のコースの場合

西武新宿線「中井」駅から

1. 北口を出て直進
2. 山手通り高架下4差路を左折(中井通りに入る)
3. 中井通りをしばらく直進
4. ローソンがある交差点を右折し、五の坂を上る
5. 上りきったら左折し、100メートルほど直進すると正門に着く (所要時間:約8分)

都営大江戸線「中井」駅から

1. A2出口から出たら左折
2. 西武新宿線中井駅南口階段から自由通路を経由し、北口を出て直進
3. 中井通りをしばらく直進
4. ローソンがある交差点を右折し、五の坂を上る
5. 上りきったら左折し、100メートルほど直進すると正門に着く (所要時間:約8分)

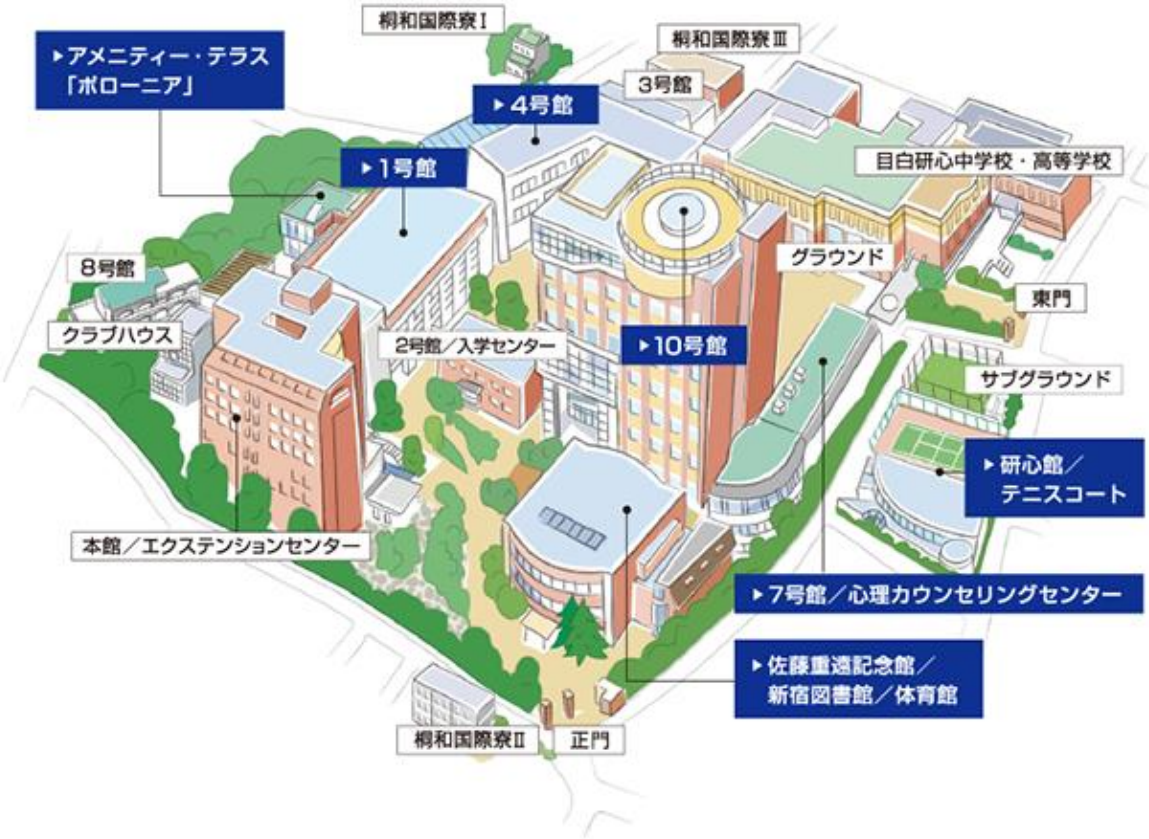
東京メトロ東西線「落合」駅から

1、出口2a を出たら左へ進み、1つ目の信号を左折
2、浅野屋(そば屋)の角を右折。
3、橋を渡るまで道なりに直進(途中下り坂があります)。
4、踏切が見えたら渡り、そのままサンクス向かいの「五の坂」を上る。
5、上りきったら左折。
6、100メートルほど直進すると正門につく。
(所要時間:約12分)

※ 必ず出口2a から来てください。
他の出口から出ますと、大変遠くなっています。

会場案内

【目白大学新宿キャンパス案内図】



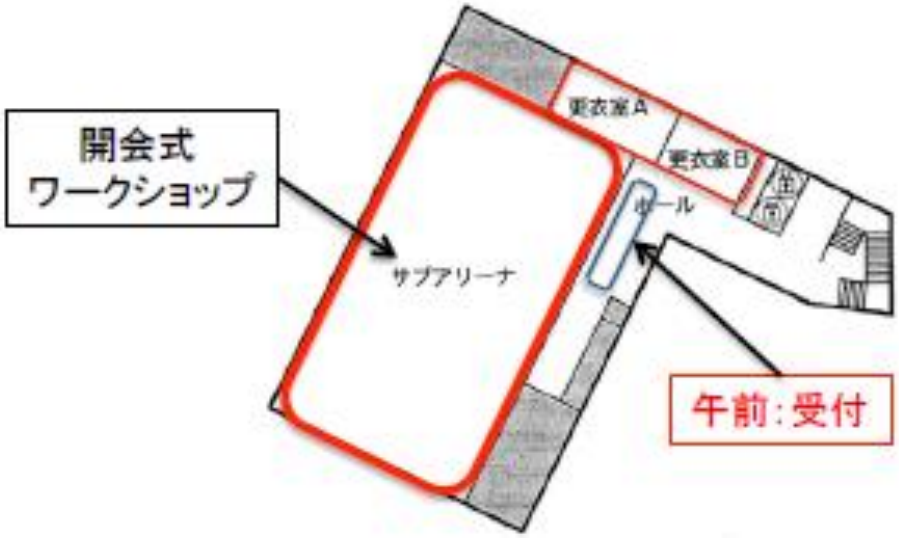
4 号館地下 2 階（サブアリーナ）：午前受付，開会式，ワークショップ

10 号館 3 階（10303）：午後受付，研究報告，事例報告

10 号館 3 階（10302）：クローク

10 号館 3 階（10300，10301）：休憩室

4号館地下2階（午前）



10号館3F（午後）

参加者へのお知らせ

※ワークショップにつきましては，からだを動かしながら行うものとなりますので，運動に適した服装と室内シューズをご用意いただきますようお願いいたします．

1. 受付

受付につきましては，午前は 4 号館地下 2 階に設けます．使用会場の関係で，午後からは，10 号館 3 階に移動いたしますのでご注意ください．受付の際，事前申し込みおよび振り込みがお済みの方は，受付にて出席確認の上，ネームカード（領収書付き）をお受け取り下さい．事前の申し込みまたは振り込みがお済みでない方は，受付にて手続きをお願いいたします．ネームカードにつきましは，氏名及び所属をご記入の上，期間中は会場にて必ず着用してください．

なお，共同発表者のご欠席の場合や金額の過不足等がある場合には，発表者に責任をもってご対応いただくこととなりますので，ご了承ください．

2. 参加費

参加費は以下のようになっております．

会員校専任教職員および個人会員：2,000 円（2/1 以降の申し込み；3,000 円）

非 会 員：3,000 円（2/1 以降の申し込み；4,000 円）

大学院生：1,000 円（2/1 以降のの申し込み；2,000 円）

発表者へのお知らせ

事例報告・研究報告

1. 1 演題につき，**発表 10 分，質疑応答 5 分の計 15 分間**です．**8 分，10 分，15 分**に合図をします．発表時間の厳守をお願いいたします．
2. 抄録集とは別に配布資料が必要な方は **60 部**ご用意ください．
3. 接続するノートパソコン（レーザーポインタ含む）は，原則として各自ご持参していただくことになっておりますので，ご注意ください．Mac のパソコンで正常に投影されない場合は，当方用意の Windows PC で発表いただきますので，Mac ユーザーの方は，パワーポイントファイルを USB メモリに入れてご持参ください。
4. プロジェクターへの接続は VGA 端子のみとなっております．変換アダプタが必要な場合は各自でご用意ください．
5. 次演者は指定の場所に着席してください．
6. 発表に関して不明な点は，お気軽にお問い合わせください．お問い合わせ先は，プログラム抄録集担当の中山正剛（**6th.forum.2018@gmail.com**）まで．

一般発表プログラム

3 月 1 日（木）13：00～16：55　4 セッション 12 演題

【一般発表】

座長1　西脇 雅人（大阪工業大学）

事例-1	13:00～13:15	大学一般体育授業におけるソフトバスケットボールの有効性
	○小谷　究（流通経済大学）	
事例-2	13:17～13:32	音声認識デジタルペンを用いた体育実技授業における実践応用 ―教養体育バスケットボール授業における活用事例―
	○難波秀行，高橋亮輔，北村勝朗（日本大学）	
事例-3	13:34～13:49	英語教育につながる体育の可能性をさぐる試行 ―日常的な身体操作における欧米人との違いへの気づきと言語との関連性―
	○冨岡　徹（名城大学）	

座長2　平工 志穂（東京女子大学）

事例-4	14:00～14:15	野外実習における障がい学生への合理的配慮と合意形成の過程
	○西村次郎，松尾美香（岡山理科大学），望月雅光（創価大学）	
事例-5	14:17～14:32	ASASPO倶楽部登録者の生活・運動習慣および体育授業に関する意識調査 ―2016年度入学の1年次登録者と非登録者の比較―
	○水﨑佑毅，秀 泰二郎，山﨑郁美，森本百合香，川畑和也，檜垣靖樹，田中 守（福岡大学）	
事例-6	14:34～14:49	大学体育における社会人基礎力修得への課題 ―授業アンケートおよびルーブリック評価からの考察―
	○藤林真美，内部昭彦，横山喬之，近藤潤，河瀬泰治（摂南大学）	

座長3　小谷　究（流通経済大学）

事例-7	15:05～15:20	体育授業で獲得したライフスキルと大学生活との関連
	○東海林祐子（慶應義塾大学），島本好平（明星大学）	
事例-8	15:22～15:37	ASASPO倶楽部の現状と今後の課題 ―スポーツイベントに着目して―
	○川畑和也，秀 泰二郎，水﨑佑毅，山﨑郁美，森本百合香，檜垣靖樹，田中 守（福岡大学）	
事例-9	15:39～15:54	ASASPO倶楽部筋力アッププログラムの新たな試み ―現状と今後の課題―
	○秀 泰二郎，水﨑佑毅，川畑和也，山﨑郁美，森本百合香，檜垣靖樹，田中 守（福岡大学）	

座長4　藤本 敏彦（東北大学）

事例-10	16:05～16:20	聴覚障害者スポーツを題材とした教育・医療系学部学生への講習会開催 ―筑波技術大学教育関係共同利用拠点事業の利用報告―
	○中島幸則，香田泰子，天野和彦，向後佑香，小森園一樹（筑波技術大学）	
研究-1	16:22～16:37	ポケモンGOのプレイが大学生の日常歩数に及ぼす影響
	○西脇雅人（大阪工業大学）	
研究-2	16:39～16:54	大学スポーツ推進に関する学生の意識
	○小林勝法（文教大学）	

ワ ー ク シ ョ ッ プ

3 月 1 日（木）10:15～11:45

【4 号館地下 2 階（サブアリーナ）】

テーマ

大学教養体育のための『体つくり運動アプリ』の活用ワークショップ

佐藤　豊 氏（桐蔭横浜大学）

【講師プロフィール】

佐藤　豊　（さとう　ゆたか）　　昭和 37 年９月生

所　属　　桐蔭横浜大学　スポーツ健康政策学部スポーツ教育学科　教授
（元文部科学省スポーツ青少年局企画体育課　教科調査官）
225-8503　神奈川県横浜市青葉区鉄町 1614
e-mail;　　yutaka.sato@toin.co.jp
九州体育・保健体育ネットワーク研究会　https://kyushunet.com/sns/index.php

研究分野　学習指導要領、体育科教育、運動部活動、諸外国のカリキュラム検討、学習評価
スポーツ行政、教育委員会支援システム、体育理論、単元構造図、ＩＣＴ活用等

主要職歴

昭和６１年４月　神奈川県教育委員会　　主事
昭和６３年４月　神奈川県公立高等学校　教諭
平成　８年４月　神奈川県　　主任主事
平成１０年４月　神奈川県公立高等学校　教諭
平成１６年４月　神奈川県教育委員会教育局保健体育課　（兼務）指導主事
平成１８年４月　国立教育政策研究所教育課程調査官
（併任）文部科学省スポーツ・青少年局企画・体育課教科調査官
平成２３年４月　鹿屋体育大学　教授
平成２８年４月　桐蔭横浜大学　教授

学　　位　教育学修士

所属学会等 AIESEP(国際スポーツ教育学会)、日本体育学会，日本体育科教育学会、日本体操学会
日本スポーツ教育学会（理事）、日本野外教育学会、日本学校心理士会、

主要学歴　　昭和６１年３月　筑波大学体育専門学群卒業
平成１５年３月　横浜国立大学大学院教育学研究科修士課程修了

主な論文、著作、委員等

（研究論文等）

- Yutaka Sato, Learning of Teachers by autonomous Community of Practice: Through development of the wide area teacher’s network in Japan,　East Asian Alliance of Sport pedagogy Conference, KSPOP(韓国スポーツ教育学会),3-21,2014.8
- 佐藤豊，菊幸一，森良一，高橋修一，新たな時代の保健体育のアウトカムを考える『保健と体育の充実に向けた教育課程の可能性』：九州体育・保健体育ネットワーク研究会 2016 ファイナル in 福岡（<特集Ⅱ>高大院連携教育の模索），桐蔭論叢，35 号，2016，p35-41
- 佐藤豊，友添秀則，柴田一浩，大越正大，深見英一郎，学習指導要領の情報共有システム構築のための試論，スポーツ科学研究 13 号，2016，p12-27
- 佐藤豊，　栫ちか子，　鹿屋体育大学における 2014 年度保健体育科教育法Ⅳの授業実践とその省察ー体験学習モデルに基づくアクティブ・ラーニング型授業における実践的指導力育成システムの構築に向けてー，鹿屋体育大学学術研究紀要第 52 号，2016，p35-67，
- 教員養成、現職教員の協働によるアクション・ラーニング研修プログラムの開発(平成 27 年度～30 年度　科学研究費助成事業（基盤研究（B））課題番号　15H03064)

・北広島町立芸北小学校，中学校，(佐藤豊，運営指導委員として)社会の中で自律して生きる力を育てるため，小学校から中学校までの９年間に「挑戦科」を新設した際の教育課程，系統的な指導方法についての研究，平成 28 年度研究開発実施報告書ｐ94，2017.1
・佐藤豊，スポーツの価値を基盤とした授業を通して目指すもの，授業づくりグループワーク，日本アンチ・ドーピング機構(JADA)スポーツの価値を基盤とした授業づくりワークショップ報告書 2017，p9-13，p44-70

(委員等)

・平成 20-21 年改訂　学習指導要領及び解説(中学校、高等学校体育の分野)編集担当者
・国立教育政策研究所「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料(中学校保健体育)編集担当
・学校体育実技資料第７集「体つくり運動」（改訂版）作成協力者(平成 23 年度)
・国立教育政策研究所「評価規準、評価方法等の研究開発に関する検討委員（高等学校)」(平成 24～25 年度)
・長崎県地域スポーツ人材活用による運動部活動等推進事業委員会（座長）（平成２３年度～）
・毎日カップ中学生体力つくりコンテスト審査委員（平成 17 年～現在）
・JADA スポーツの価値を基盤とした教育推進協力者(26～)、横浜市教育課程推進委員(27～)他

(著書等)

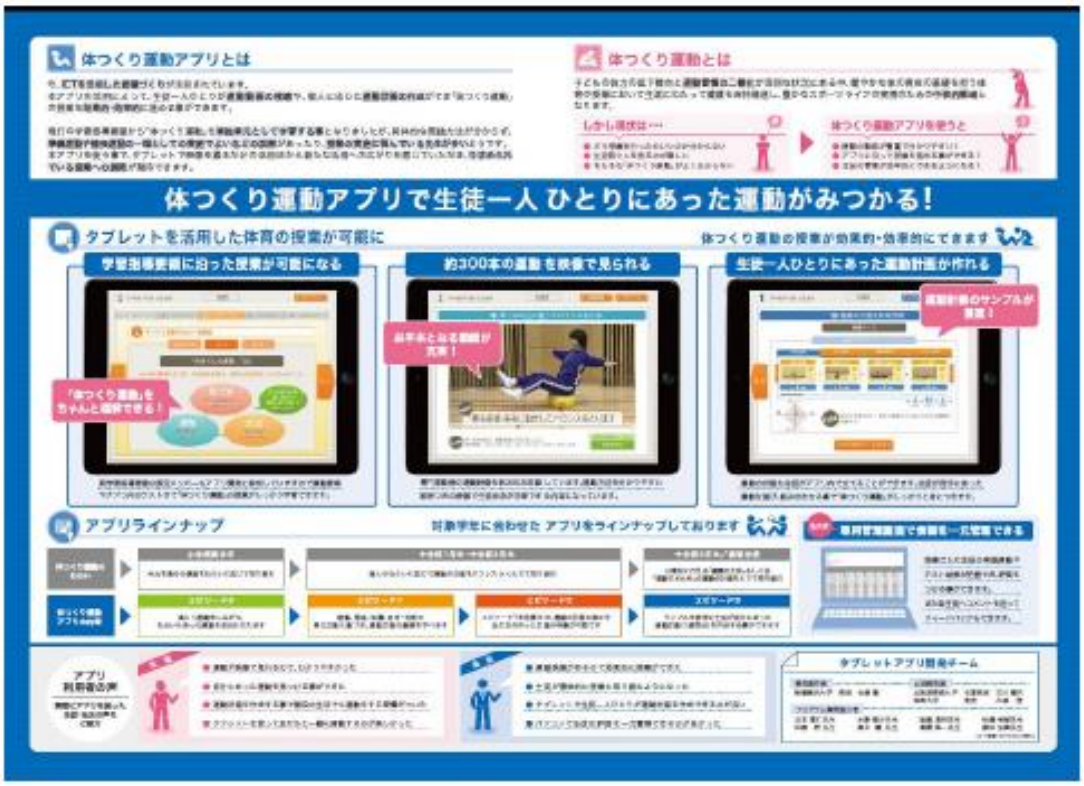
・教師を目指す学生必携　保健体育科教育法(共著)　2009．1　大修館書店
・高等学校　新学習指導要領の展開（高等学校保健体育授業改善研究会編著）明治図書　2010．4
・めざそう保健体育教師(杉山重利、佐藤豊、園山和夫　編著)朝日出版社 2010．3
・楽しい体育理論の授業をつくろう（佐藤豊、友添秀則編著）　2011．8　大修館書店
・観点別学習状況の評価規準と判定基準　中学校保健体育編（佐藤豊、森良一編著）2012．3　図書文化社
・現代スポーツ評論 28 号「学校運動部活動とこれから」2013.5　学校運動部活動の教育的意義を再考する
・電子書籍　「見てすぐできる　中学校体育指導事例集」NAC 出版社 http://nsac-dbook.jimdo.com/
・体つくり運動アプリ・プログラム　2014.3　http://www.karadatsukuri.jp/

(プロフィール)
神奈川県出身 55 才。高等学校保健体育科教員として１４年間勤務。神奈川県指導主事を経て平成 18 年度より文部科学省入省、20-21 年度改訂の中学校及び高等学校「体育の分野」の学習指導要領改訂及び解説編集を担当。新しい学習指導要領の理念に基づく単元の構造図作成に基づく図式によるイメージの構築、効率的・効果的な評価など提案。平成 28 年より桐蔭横浜大学教授として大学で教鞭。現在は、九州体育・保健体育ネットワーク研究会による広域連携モデルの研究、ICT 活用による電子書籍の作成、体つくり運動アプリの開発、体育理論の授業づくり、教師教育のための効果的ワークショップ、大学・教育行政・教員のネットワーク構築等の研究。

第6回 大学体育研究フォーラム

『大学教養体育のための「体つくり運動アプリ」の活用ワークショップ』

1



① 体つくり運動アプリの全体像

操作イメージについて

【先生管理画面】

日本体操学会第15回大会配布資料

操作イメージについて

【生徒操作イメージ】

日本体操学会第15回大会配布資料

検証　高校・大学生模擬授業での活用

授業後の学生の感想

- 見本があり、非常に効率が良い。扱いに慣れないと授業が停滞するので、対応力を身につける必要がある。
- 映像を見ながら、運動を実施できるのでわかりやすい。
- それぞれが違う動きを学習するには、タブレットが不可欠
- 最初はとまどったが、タブレットを見てじっくりと計画が立てられることが良かった。
- 自分自身の授業イメージをもてないとソフトに使われてしまう。うまく使うスキルが必要だと感じた。
- 教師がタブレット操作に長けている必要があると感じた。

結果と考察

E大学　体つくり運動・模擬授業選択者（N=41）の前後の変化

体つくり運動のねらいと効果	事前 平均値	事後 平均値	有意確率
体つくり運動の授業は，体を鍛えるためにある	3.79	2.62	.000
体つくり運動の授業は，準備運動で実施するとよい	3.79	3.24	.062
体つくり運動は，よく運動をする生徒に有効だと思う	2.74	2.95	.445
体つくり運動は，あまり運動しない生徒に有効だと思う	3.83	4.10	.175
体つくり運動とトレーニングは同じである	2.69	1.64	.000
体つくり運動は，他の領域の中で実施した方がよい	2.55	2.55	.824

体つくり運動のイメージ	事前 平均値	事後 平均値	有意確率
体つくり運動の授業イメージがわかない	4.45	2.12	.000
体つくり運動の授業は楽しいと思う	3.43	4.19	.003
体ほぐしの運動の授業イメージがわかない	4.38	2.00	.000
体力を高める運動の授業イメージがわかない	3.93	1.98	.000

模擬授業は、3～4人組で、7時間のプログラムのうちの1時間を担当し、教師役と生徒役に分かれて、1グループ20分を実施したもの

E大学　体つくり運動・模擬授業選択者（N=41）の前後の変化

タブレットの操作・運用	事前 平均値	事後 平均値	有意確率
タブレットの操作は難しい	4.05	4.48	.035
タブレットの活用は，授業の進め方が大切である	3.93	4.48	.001
体育の授業では，タブレットは一人一台で進めるとよい	3.21	2.64	.002
タブレットの操作についての知識を高めたい	4.17	4.43	.020
タブレットの管理が大変だと思う	4.50	4.71	.095

体つくり運動＋タブレット導入	事前 平均値	事後 平均値	有意確率
タブレットを活用すると体つくり運動の授業が進めやすい	3.48	4.00	.004
運動の映像を見せることで個人に応じた計画が立てられる	4.10	4.64	.000
体つくり運動のソフトを使って授業をやってみたい	3.79	4.24	.022
体つくり運動のソフトの利用は学習評価が行いやすくなる	3.62	4.07	.009

<参考資料>

1)小学校、中学校、高等学校学習指導要領解説体育編、保健体育編、文部科学省、2008、2009

2)学校体育事例集第7集　体つくり運動、文部科学省、2012

3)教育の情報化ビジョン、文部科学省、2011
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/04/1305484.htm

4)佐藤豊(鹿屋体育大学)、大塚隆(東海大学)、古川善夫(北海道教育大学)、高橋修一(国立教育政策研究所)、佐藤若(山形県立山形中央高等学校)、木原慎介(東京都墨田区立竪川中学校)、後藤晃伸(愛知県立一宮高等学校);「運動の計画」を立てる能力の育成を促す体つくり運動アプリの開発-タブレットの効果的な活用の検討-日本体育学会岩手大会体育科教育学(教)27-013 発表資料、「運動の計画」を立てる能力の育成を促す体つくり運動アプリの開発,日本体育学会,2014

5)佐藤豊;ICT(タブレットPC)の活用事例－教員養成科目(保健体育科教育法Ⅲ)における指導力の向上効果について－,鹿屋体育大学スポーツ情報センター広報第5号,P14-19,鹿屋体育大学,
http://itec.nifs-k.ac.jp/bulletin/2014.pdf,2014

6)佐藤豊、体つくり運動の学習アプリの開発、体育科教育11月号、P38-42,62巻-11号,大修館書店,2014

7)佐藤豊他3名、日本体育科教育学会 第20回大会 ラウンドテーブル、2015(入稿中)

8) 佐藤豊、体つくり運動とICT活用～体つくり運動アプリの紹介～、エデュカーレ保健体育no.22,p1-7,第一学習社,2015

9) 木原慎介(東京国際大学)、佐藤豊(鹿屋体育大学)他4名、運動習慣の形成・継続的な中学1学年「体つくり運動アプリEpisode1」を用いた実践事例から、日本体育学会予稿集,p366

日本体育学会第15回大会配布資料

番号	画面名称	機能説明
①	計画スケジュール	この画面で計画を作成します。
②	セルフテスト	体力の自己テストを行います。
③	運動ムービー	各運動を動画で確認します。
④	解説、知識、思考・判断の学習	学習の内容をテストで確認します。
⑤	振り返り	動画等の視聴を振り返ります。
⑥	視聴マニュアル	運動の計画を立てる際に確認します。
⑦	体つくり運動の基礎	エピソードF1～2の学習内容を振り返ります。
⑧	運動の計画	各種目に作成した運動計画を反映します。
⑨	計画を新規作成	新たに運動計画を作成します。
⑩	計画一覧表示画面	作成した計画が一覧で表示されます。計画の修正もできます。
⑪	日常生活での運動	日常の運動時間を入力します。
⑫	その他の運動	授業や部活動などのその他の運動時間を入力します。
⑬	計画時間	1日の運動の合計時間が自動で計算され表示されます。
⑭	アプリの使い方	アプリの使い方を確認します。
⑮	ログアウト	アプリを終了する時に使います。

①セルフテストで体力把握

②コミュニケーションを図ろう

③マイ・プログラムを作ろう

④運動を選択してみよう

⑤一週間の計画を作ろう

⑥体つくりの知識を高めよう

発表抄録（事例報告，研究報告）

3 月 1 日（木）13:00～17:00＜10 号館 3 階（10303）＞

第 1 セッション 3 演題（13:00～13:49）

事例 1-3　座長：西脇 雅人（大阪工業大学）

第 2 セッション 3 演題（14:00～14:49）

事例 4-7　座長：平工 志穂（東京女子大学）

第 3 セッション 3 演題（15:05～15:54）

事例 8-10　座長：小谷　究（流通経済大学）

第 4 セッション 3 演題（16:05～16:54）

事例 11，研究 1-2　座長：藤本 敏彦（東北大学）

大学一般体育授業におけるソフトバスケットボールの有効性

○小谷究（流通経済大学）

キーワード：初心者，新型ボール，EVA素材

緒言 及び 目的

バスケットボール競技で使用されるボールは他の競技で用いられるボールと比較して重く、表面が硬いためボールが手や顔に当たった際に痛い場合がある。そのため、小学校のバスケットボールの授業では、ボールがパスされてもキャッチせずに避けてしまうことがある。そこで、2011年に株式会社ミカサよりEVA素材で作成された手触りが柔らかく軽いバスケットボール（以下、ソフトバスケットボール）が発売された。ボールのサイズは小学生が使用する5号サイズのもので小学校の授業で導入されている。しかし、大学一般体育のバスケットボールの授業にもボールをキャッチせずに避けてしまう学生が存在する。大学一般体育の授業でソフトバスケットボールを使用することでより多くの学生が積極的にプレイに参加できることが予想される。そこで、株式会社ミカサと大学生が使用する6号サイズのソフトバスケットボール（350g）を開発し、大学一般体育授業における有効性について検討した。

方　法

受講生46名を対象に、大学一般体育のバスケットボールの授業（全15回中1回）でソフトバスケットボールを使用し、授業後にアンケートを実施した。受講生は「今後、バスケットボールの授業があった場合に今回使用したソフトバスケットボールを使用したい」という質問に対して、「そう思う」、「ややそう思う」、「どちらでもない」、「ややそう思わない」、「そう思わない」のいずれかの回答を選択し、それぞれ5, 4, 3, 2, 1点に換算して得点化した。また、回答した理由について自由に記述させた。

結　果

アンケートの結果、バスケットボール経験者男子の得点が1.8±0.8点（n=10）、経験者女子の得点が2.8±1.3点（n=4）、初心者男子の得点が2.0±0.8点（n=7）、初心者女子の得点が4.1±1.0点（n=25）であった。質問に対して初心者女子の88.0%が「そう思う」、「ややそう思う」と答えていたが、経験者男女、初心者男子には「そう思う」、「ややそう思う」と答えた者はいなかった。「そう思う」と答えた初心者女子が、挙げていた主な理由は「普段使用するバスケットボールに比べて、軽く、投げやすかった」、「ぶつかってもそこまで痛くない」、「ボールにあたったときの怖さが多少軽減される」、「固いボールより恐怖心が減った」、「いつもより動けた」、「いつものバスケより楽しめた気がする」であった。初心者女子以外の回答者が「そう思わない」理由として自由記述した内容は「パスしにくかった」、「軽すぎて入らない」、「軽すぎたと感じた」、「いつも使っているボールになれているから新しいボールを使ったとき違和感を感じた」であった。

考　察

経験者男女、初心者男子はそもそもボールに対する恐怖心を持っておらず、通常のバスケットボールの重さに慣れていること、さらに、男子については女子よりも筋力が高いことからソフトバスケットボールでは軽すぎて操作が困難になったと考える。一方、初心者女子はボールが柔らかいことからボールに対する恐怖心が軽減し、さらに、ボールが軽く投げやすいことから積極的にプレイに参加できたものと考えられる。

結　論

以上の結果から、大学一般体育のバスケットボールの授業におけるソフトバスケットボールの使用は初心者の女子に対して有効であることが考えられた。

音声認識デジタルペンを用いた体育実技授業における実践応用

－教養体育バスケットボール授業における活用事例－

○難波秀行，高橋亮輔，北村勝朗（日本大学理工学部）

キーワード：音声認識デジタルペン，体育実技，教養体育，チームビルディング

【目　的】

体育授業では，運動技能の獲得に加えチームワークやコミュニケーション能力を高めることも目的としている．これまでチームビルディングの一環として，一般的な大学ノートを配布しチーム内で輪番制にして情報共有を図ってきた．しかしながら，週 1 回の授業時間内に全員がノートを閲覧するのは困難であった．そこで，音声認識デジタルペンを用いると PDF ファイルを授業前に全員が各自のスマートフォンで確認し，前回の反省を共有した上で授業に臨めるのではないかと考えた．さらにこのペンを用いると従来のノートでは不可能であった音声情報の共有が可能となり，文字情報のみでは伝わりにくい内容も共有できるのではないかと考えた．

【実　践　方　法】

大学 1 年生男子，後期バスケットボール受講者 27 人（4 チーム：1 チーム 7 人），平均年齢 19.3±0.8 歳を対象とした．各チームに 1 本の音声認識デジタルペンと専用ノートを配布した．

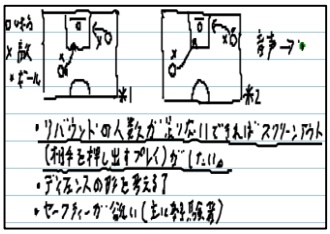
音声認識ペンと専用ノート

授業の様子

ノートの使用方法は，見開き 2 ページの左側に自己紹介，右側上段に当日の運動内容，下段に反省を記入させた．また，イラストを用いることを推奨し，音声情報を記憶させる方法を伝えた．毎週の授業前日昼休みにデジタルペンとノートを提出させ，教員はデジタルペンの情報を PC に取り込みドロップボックスを用いてファイル共有を図った．この取組みに対する評価を行うために，15 回目の最終授業時に受講者全員に対してアンケート調査を行った．

【結　果】

チームメートが記入した内容を次の授業に活かせたかについて，かなり活かせた 1 人，時々活かせた 8 人，少しは活かせた 13 人を合わせた 81.5%（22 人）から前向きな回答が得られた．前期に従来の大学ノートを利用した 18 人にデジタルペンとの比較をさせたところ，かなり優れていた，優れていたと回答したものは 83.3%（18 人中 15 人）であった．自由記述では，スマホでいつでも反省を見られた，音と目から情報が入った，会話のきっかけになった，書きながら話すのはコツが必要であったなどの意見があった．一方で，使用方法を全く理解できなかったものが 7.4%（2 人），音声認識機能をあまり理解できたかったものが 22.2%（6 人）であった．



音声デジタルノートの記入例

【考　察】

使用したデジタルペンは従来のノートと比較して，情報共有の点では有効であり，一定の割合で授業に役立ったと回答していたが，音声認識機能を活用するためには使用方法を十分に理解させる必要があった．音声認識デジタルペンと専用ノートは，週 1 回の実技授業において「実践」→「振り返り」→「情報共有」→「反省」のサイクルをサポートするツールとして有効であったと考えられた．

英語教育につながる体育の可能性をさぐる試行

日常的な身体操作における欧米人との違いへの気づきと言語との関連性

○冨岡　徹（名城大学）

キーワード：日本と西洋の比較，身体操作法，歩き方，姿勢

はじめに

昨年度（2016年度）より、外国語学部の教養教育科目「健康・スポーツ科学」を担当することとなり、表題のような観点からの教育を試行している。

これまで、日本人と西洋人の歩き方と姿勢に妙な差異を実感してきた。履物の違いなど生活様式の違いが主な原因と思われるが、それ以上に文化人類学的観点から生まれた身体操作法の違いと考えることもできる。このような観点からの授業展開について紹介する。学部教育の一環としての保健体育の在り方を考える試みとしてご意見を頂きたい。

日本人と西洋人の歩き方の違い

日本人の歩き方は着地時に膝が曲がり、後方の足をあまり後ろに押し出さずに歩く傾向がみられる（図1）。また、踵を引きずったり、体幹の回旋も乏しかったり、腕をあまり振らない傾向もある。このような歩き方の違いは、履物の違いもさることながら、文化、歴史的な価値観や服装などによるものと考えられる。

図　日本人と西洋人の歩き方（『美しい日本の身体』矢田部英正著より）

http://www.josai.jp/lifelong/ex/2011A/aesthetics/110901_1.html 参照

このことを学生に説明すると「ネイティブの先生方の歩き方は格好いい」という認識はあっても、写真を例示するまで、どこがどう違うかまでの認識はない。そこで、上記のような視点を示唆すると共感が得られる。その背景として日頃の姿勢にも差異がみられるほか、思考性向についても認められる違いを示し、言語習得上のヒントや異国に対する文化的理解の一助を示そうと試みている。

身体操作法の違いの例示と理解

日常生活上の様々な違いについて考えると、下表のような差異を見出すことができる。

	西洋	日本
のこぎり	押す	引く
ナイフ（包丁）	押す	引く
武具	サーベル	刀
土を掘る	スコップ	鍬
挨拶	握手	お辞儀

例は枚挙に暇がないが、総じて、多用する筋群が屈筋か伸筋かという違いから説明できる。このことから、レスリングやボルタリングなど屈筋を多用する競技において世界的に好成績を上げていることが説明できないだろうか。一方で、文化人類学的にも、日本人は「まとめる」指向性のある民族との指摘（『「縮み」志向の日本人』李御寧）に従うと、身体を丸める傾向があることからも理解が進む。

このような日本人と西洋人との姿勢や身体操作法思考性など様々な違いに気づき、グローバル化した社会を理解する試みは非常に学際的である。このような様々な比較の視点をもとに、英語を学ぶ際に母語とする彼らのポジティブな指向性や慣習、押す（伸びる）身体操作法の特徴を理解することが言語習得の一助となるという持論からの授業展開を紹介する

野外実習における障がい学生への合理的配慮と合意形成の過程

○西村次郎（岡山理科大学），松尾美香（岡山理科大学），望月雅光（創価大学）

キーワード：野外実習，障がい学生、合理的配慮，合意形成，建設的対話

１．はじめに

私立大学では、所謂、「障害者差別解消法」により障がい者への合理的配慮が努力義務となっている。合理的配慮とは、負担が重すぎない範囲での配慮であり、障害の種別や教育内容に応じて、話し合いを通した合意形成が重要になる。本稿では、野外実習科目での合理的配慮について検討する。ここでは、R 大学の平成 29 年度「エコツーリズムのための野外スポーツ」（選択科目、19 名受講）を受講した身体に障がいのある学生Ｔ君への取組について報告する。本実習は奄美大島で行い、「カヤック」「シュノーケリング」「無人島体験」等が含まれる。なお本発表に際し、T 君と母親に研究倫理上の配慮を行った。

２．合理的配慮の内容と要素

合理的配慮の内容を次のように合意形成を図った。

１）入学前の大学としての取組　入学前の平成 29 年 3 月に、T 君と母親、入学予定学科教員及び教養系教員（筆者含む）、支援課職員による面談を行った。そこでは、３つのポリシーを説明し、R 大学の教育方針の理解を深めてもらい、障害の特性やニーズを把握する建設的対話を行った。合理的配慮への積極的な対応やＴ君へ寄り添うことを伝えることで、T 君及び母親と大学との間で信頼関係を構築できた。

２）ニーズの把握と意向尊重　同年 4 月、野外実習参加の合理的配慮が求められ、5 月に、T 君と母親、教員で面談を行った。相手の自己開示性を尊重し、傾聴を心がけた結果、相互理解が深まった。

３）根拠資料の収集　T 君の障がいの状況を把握するために、①これまでの成育歴等、②障がい者手帳の種別・等級・区分認定の状況等、③医師の診断書の 3 点について確認を行った。

４）合意形成と合理的配慮の提供　6 月に、プールでの事前学習において、T 君の動作や身体的状況についての確認作業を行い、合理的配慮の内容を検討した。教員のみが対応するのは困難であるため、T 君の活動を支援する TA の配置とその経費について大学に要請することとした。この時、T 君の挑戦する気持ちへの配慮が必要であることがわかった。

３．野外実習の状況

実習中のＴ君のワークシートには、仲間の大切さや日常の便利さを実感しつつ、カヤックに乗れた喜びが表現されていた。他の学生もＴ君と自分を相対化し、困難な状況でも挑戦する大切さを学んでいた。

４．まとめ

障がい学生への合理的配慮には、相互理解による信頼関係の構築が必要であり、教育の目標、内容、評価の本質は変更せずに、個々のニーズを把握した柔軟性のある調整が重要である。また、本当に必要な支援を見極める複眼的な視点も必要である。

今後の課題として、負担すべき範囲が明確でないため、費用対効果を検討する必要がある。また、合意形成についても、個々の障がい者で状況が異なるため、関係者間で軋轢が生じない工夫を検討したい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 16K01641 の助成を受けた。

参考文献

・独立行政法人日本学生支援機構（2017）、「障害者差別解消法」施行に伴う障害学生に関する紛争の防止・解決等事例集平成 28 年度収集事例

ASASPO 倶楽部登録者の生活・運動習慣および体育授業に関する意識調査

-2016 年度入学の 1 年次登録者と非登録者の比較-

〇水﨑 佑毅、秀 泰二郎、山﨑 郁美、森本 百合香、川畑 和也、檜垣 靖樹、田中 守
（福岡大学 スポーツ科学部）

キーワード：正課外，生活・運動習慣、体育授業、アンケート

はじめに

大学生の身体活動量の低下は，問題視されている (Caspersen et al., 2000; Haase et al., 2004)また，大学生の健康・生活習慣は他の年代と比較して，著しく悪いことも報告されており (徳永・橋本, 2002)，大学生を対象とした身体活動プログラムは必要とされている．

実際に，大学生を対象とした身体活動プログラムによって身体活動への意識や態度だけでなく，運動行動にも変化を与えることが報告されている (山津, 2004; 橋本, 2006)．また，荒井ら (2009) は，運動行動の変容ステージに対応した体育授業を考案し，日常身体活動が増えることを報告している．

しかし，これらのプログラムは授業時間を利用して行われたものが多く，学生が自主的に参加したとは言い難い．身体活動量を増やすためには，学生自身が健康や生活・運動習慣に関心を持ち，自主的にプログラムに参加することも必要である．そこで，我々は，「ASASPO倶楽部」と呼ばれる，すべての学部や学年を対象に，正課外の運動プログラムを年間通じて提供している（水﨑ら, 2017）．学生は，ASASPO 倶楽部へ登録後に，興味のあるプログラムに参加することが可能である．今後，このようなプログラムを増やしていくためにも，ASASPO倶楽部へ登録した学生 (以下: 登録者) の実態調査を行い，学生の特徴を把握することは重要と言える．

そこで，本研究では登録者の生活・運動習慣および体育授業に関する意識調査を行い，運動の習慣化に向けた正課外のプログラム発展のための基礎資料を得ることを目的とした．

方法

2016 (平成 28 年) 年度に開講した初年次共通科目「生涯スポーツ演習I」において，前期及び後期に実施した体力テストの授業を受講した 3683 名 (男子学生 2168 名, 女子学生 1515 名) を対象とした．そのうち，ASASPO 倶楽部に登録している 1 年次学生は 356 名 (男子学生 139 名，女子学生 217 名) であった．生活・運動習慣および体育授業に関する意識調査は，29 問のアンケートを用いて授業中に行った．

結果

χ二乗検定の結果，有意であった回答は，健康状態，運動・スポーツ実施時間および実施状況，体育授業，食習慣に関する項目であった．残差分析の結果から，登録者は ASASPO倶楽部に登録していない学生 (以下: 非登録者) と比較して，健康状態を良好と認識し，食生活に気を付けていることが明らかとなった．また，登録者の運動実施時間は 30 分未満が多いが，6 ヵ月以内に運動を始めたいと考えていた．大学体育の授業については，必要性を感じており，授業がすべて完了した後は，気が向いた時に学内の施設で運動・スポーツを自発的に実施したいと考える学生が多かった．

考察

運動プログラムに自主的に参加する学生の特徴として，健康状態は良好で食生活にも注意を配っているが，運動を習慣的に行えていない学生が多いことが明らかとなった．よって，ASASPO倶楽部に登録し，運動習慣を改善したいと考えていることが伺える．しかし，実際にプログラムに参加する学生は登録者数の半分にも満たないのが現状である．この原因として，学生の参加を促すプログラムを提供できていない可能性がある．荒井ら (2009) は，運動行動の変容ステージに対応した体育授業を考案し，その効果を報告している．よって，本プログラムにおいても，登録者の変容ステージに合わせたプログラムの提供や，登録者の特徴に合わせた情報宣伝活動を行うことがプログラムの発展に重要と考えられる．

大学体育における社会人基礎力修得への課題

授業アンケートおよびルーブリック評価からの考察

○藤林真美，内部昭彦，横山喬之，近藤潤，河瀬泰治（摂南大学）

キーワード：大学体育，社会人基礎力，授業アンケート，ルーブリック表

目　的

本学では，体育実技科目の到達目標として「体力の維持・向上やスポーツ技術の習得」に加え「人間力・実践力の育成」を掲げている．成果と課題を確認し授業改善につなげるために，毎年，履修学生を対象に授業アンケートを継続実施している．また今回，「人間力・実践力の育成」について評価するルーブリック表を作成，体育科目においてルーブリック評価による変容の可能性があるか否か検討した．

方　法

対象は，1 年次開講のスポーツ実技科目（文系・理系学部生の選択科目）の受講学生とした．授業アンケートは，後期最終回の授業終了後に行った．これは本科目独自で作成したもので，態度，体力・技術面の成長，意欲など本科目の到達目標を盛り込んだ 18 項目から構成されており，回答は「全くそう思わない」「あまりそう思わない」「そう思う」「強くそう思う」の 4 択とし，マークシート形式で回答させた．ルーブリック表は，授業アンケートに挙げた項目を基準に作成し，2 学科において試みた．2 学科をルーブリック評価を継続して行う継続群と行わない対照群に区分した．そして 2 学科とも，前期の本科目導入期；5 月と，終了期；7 月の各 1 回，継続群が使用した内容と同様のルーブリック評価を行った．なお本研究は，本学医療研究倫理委員会の審査と承認を受けて実施した．

結　果

今回の授業アンケートは, 1,147名の学生より回答を得た. このうち欠損データがあった 61 名のデータを削除し, 1,086名のデータを有効回答として解析を行った．まず，各項目の平均値の年次変化を調べた結果，多くの項目で有意に上昇していた．さらに今回は，協調性養成についての検討を目的として「学生同士のコミュニケーションがとれたか」項目に対してポジティブな回答をしたグループを High 群（N=928），ネガティブ回答したグループを Low 群（N=158）とし，他 17 項目の回答について両群の平均値を算出，比較した．その結果，High 群は Low 群に比して，「意欲的」「楽しい」「好き」「友人作りに貢献」「規範意識の育成」項目にそれぞれ高値（すべて $p<.001$）を示した．ルーブリック評価は，継続群においてのみ,「技術」「意欲」項目に有意な上昇を,「体力」「リーダーシップ」「規範意識」「主体的な行動」に有意傾向を認めた．

考　察

中教審が学生に求める学士力として掲げる「汎用的技能」：コミュニケーション・スキル,「態度」：自己管理力，チームワーク・リーダーシップ，倫理観などは，体育実技の積極的な受講により修得可能であると仮説を立てた．今回のアンケート結果は，体育科目受講による学士力向上を実証したものと思われる．またアンケート結果が年々伸びている結果は，担当教員が毎年，本アンケート結果を真摯に受け止め，授業改善に役立てたことが要因であることが推察される．一方でルーブリック評価について，15 コマの授業において継続して実施した継続群のみ望ましい変容が見られた結果より，学生に本科目の到達目標を繰り返し明示し，学生がその都度自分自身の態度と照合する作業を行うことの有用性を示唆するものである．

体育授業で獲得したライフスキルと大学生活との関連

○東海林祐子（慶應義塾大学），島本好平（明星大学）

キーワード：ライフスキル，ライフスキル自己評価，2 次的な影響

目　的

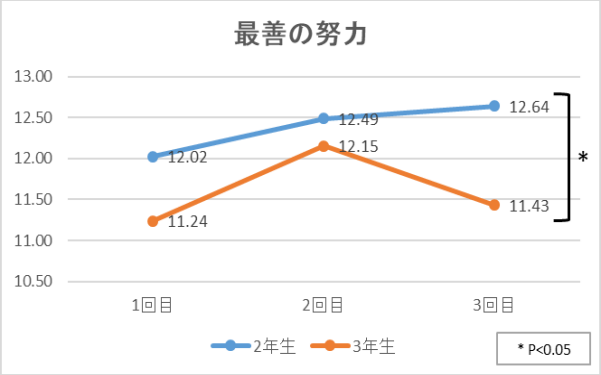
本研究の目的は入学時に体育授業を通じて獲得したライフスキルがその後の大学生活を通じてどのように変化するかについて明らかにし，大学体育の果たす役割について検討することを目的とする．集団のクラス単位で獲得したライフスキルはクラスごとに履修する体育授業によって一時的にコミュニケーションスキルなどが向上することが明らかになっている（東海林ら，2016）．しかし，その後の大学生活全般のなかで，それらのライフスキルはどのような機会や学びのなかでどのように変化していくのかを調査した研究は見当たらない．本研究では集団での履修後，それぞれのライフスキルの特性を持つ学生が，大学教育全体のなかでどのようなライフスキルを獲得しようとしているのかを縦断的に調査する．大学生活のなかで体育授業がどのような役割を持つかについても検証する．

方　法

対象はK大学Ｓキャンパス(以下，Ｓキャンパス)の体育 2 の最終課題（2017 年春学期）のレポート提出者 2 年生 131 名と 3 年生 97 名である．Ｓキャンパスでは初年次にクラスごとで受講する体育 1 の履修後は，自分の意思で自分の好きな種目を自由に選択できる体育 2 へ進む．最終課題のレポートは基本的に規定回数を満たせば学期末いつでも提出することが可能である．本研究ではライフスキル自己評価(島本ら，2013）をトータルで 3 回(1 年次に 2 回，その後体育 2 の課題として 1 回)実施している学生を対象とした．3 回のライフスキルの獲得レベルの変化を 2 要因の分散分析（時期×学年）で分析した．またそれぞれの学年の学生がどのようなライフスキルを獲得しているかについて最終レポートを分析した最終レポート分析はすべてデータ化し，質的分析を KH Coder（樋口，2014）を使用した．

結　果

学年におけるライフスキルへの影響を見ると 3 回を通じて『最善の努力』において有意な差が認められた（$F(2,226)=9.937$, $p<.05$）．多重比較では 2 年生は初回から 3 回目まで徐々に向上するが, 3 年生は 1 回目から 2 回目にかけて有意に向上したのち 3 回目では 1 回目とほぼ同程度にまで低下することがわかった．最終課題のレポートでは体育授業やそのほかの大学生活を通じて『コミュニケーションスキル』が獲得されることがわかった．



考　察

体育が 3 単位の必修であるＳキャンパスでは大学生活のなかで体育をどのように位置づけるのか重要な課題である．本研究では 3 年生の時期では『最善の努力』が低下することがわかり初年次に体育授業で獲得したライフスキルを日常生活などでどのように獲得させるのか（2 次的な影響）課題が見えた．

ASASPO 倶楽部の現状と今後の課題

-スポーツイベントに着目して-

○川畑和也，秀泰二郎，水﨑佑毅，山﨑郁美，森本百合香、檜垣靖樹，田中守
（福岡大学スポーツ科学部）

キーワード：大学体育，スポーツイベント，バスケットボール

目　的

ASASPO 倶楽部（以下、ASASPO）は、福岡大学スポーツ科学部が一般体育の延長として、全学部学年の学生に対して運動の機会を提供するスポーツプログラムである。本プログラムは 2011 年度からスタートし、今年度で 7 年目を迎えた。実施内容に関しては毎年検討され、2017 年度は、「フィットネスプログラム」、「筋力アッププログラム」、「集中プログラム」、「スポーツイベント」を実施し、年間を通じたスポーツプログラムを提供した。このような活動の中で、今回はスポーツイベントを通して ASASPO の現状と今後の課題について検討した。

方　法

今回対象としたスポーツイベントは、ASASPO が主催する「第 3 回福岡大学バスケットボール大会」である。調査対象は、大会参加学生 81 名(男子:78 名、女子:3 名)であり、参加にあたり事前に参加者のメンバー登録を行った。アンケートは大会当日にチームごとに配布し、大会終了後に回収した。（有効回答率 72.83%）

結　果　と　考　察

事前登録学生の基本属性は、性別では 95%以上が男子学生であり、圧倒的に多く、女子学生への参加の難しさを示した。また学部別に見ると、経済学部、工学部、理学部の順に多く、全 9 学部中 7 学部の 1 年生から 4 年生までの学生が参加し、今回の大会が、学部学年の枠を超えたスポーツを通した交流の場になっていることが考えられる。さらに、バスケットボールの経験に関して、経験者が多い割合を示したが、非経験者の割合も 4 割であり、ASASPO に初めて参加する学生も多く、不定期開催のスポーツイベントへの参加の容易さも期待できる結果となった。しかし、参加動機に関しては、「友人が参加するから」と非主体的な回答が 7 割を超え、より主体的にスポーツに親しむ場を提供する必要性がある。

次に、大会に関して、「学内の掲示物を見て知った」が 7 割超と最も多く、参加を促す掲示物の有効性も示された。また、大会参加費に関しては、無料の回答が一番多かったが、40%近い学生が有料での参加も可能という結果となった。これらのことからも、今回の掲示物による情宣活動の有効性や学生の受益者負担の意識も伺える結果となった。

今回のスポーツイベントは、学部学年の枠やスポーツ経験、これまで ASASPO 参加の有無に関わらず、気軽に参加できるもので、一般体育の延長版としての機能を果たしていることが考えられる。また、初めて ASASPO に参加する学生が多く、「ASASPO 倶楽部」の認知度を上げることに繋がり、他のプログラムへの参加者の増加も期待できるだろう。

今後の課題としては、長期的な視点に立ち、教員の負担の増大や予算規模の縮小など、活動の幅が狭まることが考えられることからも、運動の機会を求める参加学生のニーズ、レベルに応じたスポーツイベントや参加費徴収型のスポーツプログラムを考案して行く必要がある。また、企画・運営の場面で、学生が習得した知識や技術を発揮できる環境を整備し、より多くの学生に、様々な形でスポーツに親しむ機会を提供していきたい。

ASASPO 倶楽部筋力アッププログラムの新たな試み

－現状と今後の課題－

○秀泰二郎，水﨑佑毅，川畑和也，森本百合香，山﨑郁美，檜垣靖樹，田中守
（福岡大学スポーツ科学部）

キーワード：筋力アッププログラム，TDMS-ST，学生インストラクター

1.　新たな試みの背景

昨年度より開始された筋力アップグプログラムは約 3 ヶ月（全 18 回）にわたり福岡大学第二記念会堂トレーニング室で総数 147 名が参加した。プログラム開始当初は 15 名の参加者で始まったが､回を重ねるごとに右肩下がりとなり、最終的には 2 名にまで減少していった。これらの結果をもとに、今年度の筋力アッププログラムはプログラムの運営体制を修正し、実施された。

2.　活動プログラムの内容について

筋力アッププログラムは 10 月 19 日から 12 月 14 日までの約 3 ヶ月間にわたり火曜日と木曜日の週 2 回、全 17 回が実施された。実施場所は第 1 回から第 4 回までは第二記念会堂トレーニング室で行われ、第5回から第17回までは総合体育館トレーニングルームにてプログラムが実施された。プログラムの実施前には体組成計（タニタ，RD-E04）により体重・筋肉量・体脂肪・体内年齢・推定骨量・BMI が測定され、心の「快適度」と「覚醒度」が数値化される二次元気分尺度（TDMS-ST）も事前・事後に測定された。参加者は筋力アップまたはダイエットを目的とした、どちらの指導に付くかを自らが選択し、その日のプログラムに挑んだ。昨年同様に指導を行うインストラクターはスポーツ科学部生でトレーナー職に興味を持つまたはトレーナーコースに所属する学生が学生インストラクターとなり、授業で学んだ理論や技術を用いて指導にあたった。

3.　参加者数の変動と心理尺度の変化

昨年度実施された全 18 回のプログラムでは 147 名が参加し、1 回のセッションは平均 8.16 名であった。今年度実施された全 17 回のプログラムでは 100 名が参加し、1 回のセッションは平均 5.88 名であった。セッション数に違いはあったが、両年度の参加者数に顕著な違いは見られなかった（p=0.06）。

TDMS-ST の結果では、覚醒度を除く全ての項目において優位に向上していた（表 1）。

表1. トレーニング実施場におけるTDMS−STの変化

		活性度		安定度		快適度		覚醒度	
第二記念会堂＋総合体育館	(n=91)	−2.52±0.40	p<0.01	−1.648±0.40	p<0.01	−4.16±0.72	p<0.01	−0.87±0.33	p<0.01
第二記念会堂	(n=31)	−2.58±0..62	p<0.01	−1.35±0.52	p<0.01	−3.94±0.95	p<0.01	−1.23±0.63	N.S.
総合体育館	(n=60)	−2.48±0.51	p<0.01	−1.8±0.54	p<0.01	−4.28±098	p<0.01	−0.68±0.39	N.S.

平均値±標準誤差

これは日常生活で経験する「苛立ち」や「極度の緊張感」などのストレスが筋力アップトレーニングによって適度な「疲労感」や「達成感」へと変化した結果であると考えられる。

4.　まとめ

本年度の筋力アッププログラムは昨年度の反省点を踏まえてグルーピングの廃止・継続したトレーニングセッション日の設定を行うとともに、新たな試みとして２カ所のトレーニング実施場でプログラムを行い、実施場所の変化を踏まえた上で、プログラムを通した参加者の心理的変化が測定された。セッション数の違いはあったが、昨年度と比較して本年度の参加者数に顕著な違いはみられなかった。また TDMS-ST の結果から、プログラムへの参加は精神的なストレス軽減と、心身ともに快適な状態へと向かわせることが証明された。

今後の課題として昨年度からの問題である継続して参加する学生の確保と学生インストラクターの実践実習の場としての充実のため、更なるプログラム運営の修正が必要であると思われる。

聴覚障害者スポーツを題材とした教育・医療系学部学生への講習会開催

筑波技術大学教育関係共同利用拠点事業の利用報告

○中島幸則，香田泰子，天野和彦，向後佑香，小森園一樹（筑波技術大学）

キーワード：大学体育，聴覚障害者スポーツ，教育関係共同利用拠点

はじめに

筑波技術大学障害者高等教育研究支援センターは，平成 23 年度より文部科学省より教育関係共同利用拠点「障害者高等教育拠点」として認定を受け，聴覚・視覚障害学生の指導・支援に活用できる教育コンテンツの開発や支援技術の情報提供等に取り組んでいる。体育・スポーツ教育の取り組みとしては，①大学教員や学生を対象とした，聴覚・視覚障害者スポーツに関する講習会の開催・講師派遣，②依頼元大学に応じた，聴覚・視覚障害学生の体育授業に関する相談・助言・支援，③大学体育授業に関する調査の結果ならびに支援事例の公開，聴覚・視覚障害者スポーツを紹介する映像資料の作成等，障害学生の体育・スポーツ活動に関する情報の収集と提供，④本事業を担当する人材の育成と活用を行っている。今回は，この取り組みの中の，他大学学生を対象とした，聴覚障害者スポーツに関する講習会の開催について報告する。

開催の経緯と実績

平成 26 年度から，A 大学体育系学生が本学を訪れ，本学障害学生とスポーツを通した交流会を行うようになった。終了後，参加学生の感想から，障害理解をする上で大変有意義なものであったことが確認できたため，将来，障害者との関りを持つ可能性が高い，教育・医療系学部の大学に対して，交流会実施のお誘いをするようになった。そして，平成 28 年に B 大学から，「まずは授業内で聴覚障害者スポーツについて，講義をして欲しい」ということになり，この取り組みが始まった。平成 28 年度は 2 回 152 名，29 年度は 3 回 187 名に対して行った。

講習会の内容

各大学において，2020 年東京オリンピックパラリンピックに向けた取り組みが数多くなされ，パラリンピックの認知度は高まっていることは間違いないしかし，筆者がこれまで行ってきた講習会において，聴覚障害者がパラリンピックに参加できないこと，聴覚障害者のためのオリンピック「デフリンピック」が開催されていることは，ほとんどの学生が理解していないことから，障害者のためのオリンピックの全体像の説明から行うようにしている。また，聴覚障害者とは，聞こえないだけで他には全く問題がないと思われているが，実際には聴覚障害者の困り事はたくさんあること，聴覚障害とは何かについて取り上げる。また，「聴覚障害者のコミュニケーション体験」を行うことによって，聴覚障害者への理解を深めてもらうとともに，日頃からの健常者同士のコミュニケーションについても振り返ってもらうような講義を行っている。

まとめ

これまで我々が行ってきた，聴覚障害者スポーツを題材とした講習会では，聴覚障害者の理解だけに留まらず，日頃の健常者同士のコミュニケーションを見直すきっかけにもなっている。このことから，より多くの大学でオリパラ教育の一環として本学の聴覚障害者スポーツを題材とした講習会に興味をもっていただけることを期待したい。

ポケモン GO のプレイが大学生の日常歩数に及ぼす影響

-日本人男子大学生を対象とした後ろ向き観察研究-

○西脇雅人（大阪工業大学）

キーワード：ゲーム，ヘルスケア，iPhone，身体活動量

目　的

我が国において，Niantic, Inc,のスマートフォン向け位置情報ゲームアプリである「Pokémon GO（ポケモン GO）」が 2016 年 7 月 22 日から配信された．このゲームは，位置情報とカメラ機能を用いる画期的なゲームであり，プレーヤーは，マップ上でポケモンという名の捕獲すべき各登場キャラクターの位置を確認し，現実世界を移動し（歩き），プレーヤーがその場所に到着すると，遭遇するポケモンを捕獲できるというゲームである．基本的に，歩行によって実際の物理的な移動を伴うことでゲームがクリアしやすくなるような仕様となっていることから，社会的にも大きな注目を集めたことは記憶に新しい．米国在住の 18-35 歳を対象とした先行研究では，ポケモン GO のプレイは，約 1,000 steps/day の歩数の増大を引き起こすことが報告されている．しかし，これまでに，日本人を対象にポケモン GO のプレイが日常の歩数や身体活動量に与える影響を学術的観点から検討した報告はない．そこで，本後ろ向き観察研究は，男子大学生のポケモン GO のプレイが日常の歩数に与える影響について検討することを目的とした．

方　法

52 人の対象者をリクルートし，除外基準（アンドロイド系の携帯電話を使用している，ポケモン GO のレベルが 0-4 に該当する）に該当しなかった 26 人の日本人男子大学生を最終的な解析対象者とした．これらの解析対象者を，ポケモン GO をプレイしているか，否か，を基に，対照群（C, n = 12）とポケモン GO 群（P, n = 14）に振り分けた．日常の歩数レベルは，2016 年 9 月から 2016 年 10 月に，アップル社の iPhone のヘルスケアアプリから取得された．P 群において，ベースラインの値を決めるための 4 週間とポケモン GO をプレイしている間の 4 週間の日常の歩数レベルのデータが解析された．また，合計 8 週間の同一期間に，C 群の歩数データが解析された．

結　果

両群のベースラインレベルの歩数に有意な差は認められなかった．さらに，C 群の歩数の経時的な変化は観察されなかった．これに対し，P 群の歩数は，ベースラインの 8,368 ± 544 steps/day から 1 週目の 10,028 ± 617 steps/day に有意に増大した（$P < 0.01$）．P 群の歩数の変化は，C 群のそれよりも有意に大きかった（1,671 ± 345 steps/day vs. -81 ± 582 steps/day, $P < 0.01$）．しかし，増大した歩数は，2 週目には，ベースラインのレベルに戻っており，値が再び増大することはなかった．

結　論

したがって，我々の結果は，日本人男子大学生において，ポケモン GO のプレイが，日常の歩数を 1 週間の間だけ有意に増大させることを示していた．

大学スポーツ推進に関する学生の意識調査

全国大学体育連合大学スポーツ推進特別委員会　小林勝法（文教大学）

キーワード：日本版 NCAA，大学スポーツ改革，全国大学体育連合，体育会学生

目　的

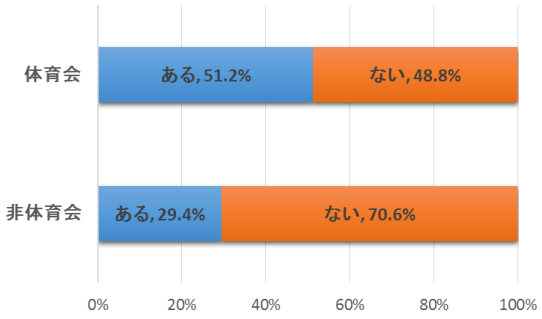
2019 年 3 月までに日本版 NCAA を創設することを目指して、国やいくつかの大学で大学スポーツ改革が進められている。大学教職員や行政、産業界が意見交換する場は設けられても、当事者である学生の意見を聞く機会はほとんど設けられていない。そこで、学生の実態と意識について、本連合がアンケート調査を実施したので報告する。

調査の概要

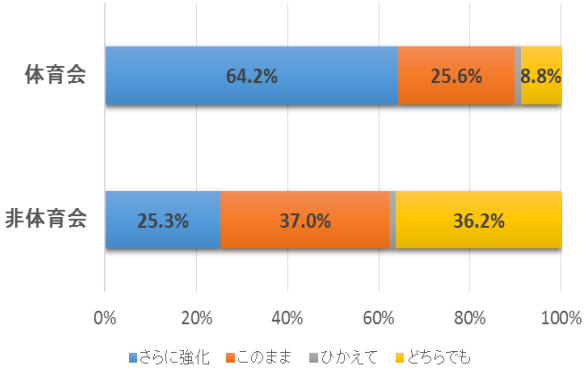
調査期間：2017 年 9 月 1 日～2017 年 11 月 15 日
調査対象：全国大学体育連合の会員校
19 大学・4 短期大学の学生
回答者：6, 203 人（男性：4, 140 人、女性：2, 063 人）
1 年生 4, 475 人、2 年生 731 人、
3 年生 657 人、4 年生以上 340 人
体育会学生 1, 703 人、一般学生 4, 500 人

結　果

1．大学スポーツ振興や大学スポーツ産業化などに関する報道を新聞やインターネットなどで見たことがあるのは、体育会学生で５割、一般学生で３割であった。



2．自分の大学が競技スポーツの強化に取り組むことについて、体育会学生はさらなる強化を望んでいるが、一般学生は「このままでよい」「どちらでもよい」合わせて７割を超えた。



3．大学スポーツ改革の取り組みの具体策について、全般的に学生の賛同が低い。学業支援や人間教育については体育会学生も一般学生もどちらも低かった。スポーツ強化とブランディングなどのスポーツ振興については体育会学生の方が比較的高かった。

考　察

現在進行中の大学スポーツ改革は、国が期限を切って進めていることもあって、進行が早い。当事者である学生が置き去りにされている感もある。この改革について、報道を見たことがある一般学生は３割に満たなかった。競技スポーツの強化を望む一般学生も３割に満たない。大学スポーツ改革は体育会学生のためだけのものではなく、一般学生も含めた大学関係者と地域のためである。その理念を伝える必要性が高いことが本調査から示唆された。

「大学体育学」投稿規定

公益社団法人全国大学体育連合 「大学体育学」投稿規定

1. **本誌の目的**： 本誌は、高等教育機関における体育（以下「大学体育」という）の実践への貢献を目的に、公益社団法人全国大学体育連合（以下「この法人」という）が発行する学術雑誌である。
2. **投稿資格**： 本誌には、この法人の会員と非会員を問わず、論文を投稿することができる。本誌編集委員会（以下「本委員会」という）は、論文を依頼することができる。
3. **投稿可能な原稿**： 投稿論文は完結した未発表のものであり、他誌へ投稿中でないものに限る。ただし、学会発表抄録や科研費等の研究報告書の内容を充実させた論文、各種研究助成金の交付を受けた研究をまとめた論文、発表済みの結果であっても新たな観点から再考察した論文は、投稿することができる。
4. **投稿論文の種類**： 表1のとおりとする。

表1 投稿論文の種類、内容、制限頁数

論文の種類	内容	制限頁数(注)
総　説	大学体育に関する特定の内容や主題について、関連文献や資料に基づいて総括的に論評した論文	12頁
原　著	大学体育に関する独創的な知見を適切な方法に基づいて提示する、理論的・実証的・方法論的な研究論文	10頁
事例報告	大学体育に関する事例を観察・考察し、今後の授業等の改善、発展、充実を促す知見を提示する論文	8頁
研究資料	大学体育に関する実践的示唆に富む内容を提示する、資料的価値の高い論文	8頁

（注）：図表等を含めた刷り上がり頁数（文字のみの場合の1頁は約2300字）

5. **原稿の書式**： 原稿は、図表も含めて1つのWordファイルにまとめたものとし、書式はA4版縦置き・横書きで全角40字×30行、余白は上下左右35mm、フォントは明朝体10.5ポイント、英数字はすべて半角入力とする。表紙、抄録、本文までの通し頁を、各頁にも1から始まる行番号を、それぞれ付すものとする。
6. **原稿の使用言語**： 投稿原稿における使用言語は、日本語のみとする（英文抄録を除く）。
7. **原稿の構成**： 表2のとおりとする。

表2 投稿原稿の構成と順序

	項目	内容
表紙	表題	簡潔かつ明瞭なもの。副題をつける場合はコロン（:）で続ける（和英両方）
	ランニングタイトル	25字以内
	論文の種類	表1から適切なものを選択
	図表の数	図と表それぞれの数を記載
	文字数	本文、文献、注の合計文字数
抄録とキーワード		300-400語の英文抄録（改行なし）とその和訳文、和英3-5語のキーワード
本文	（原著論文は以下の構成で、他の種類の論文はこれに準じた形式で、それぞれ執筆する）	
	緒言	先行研究との関連から、研究の目的と必要性を述べる。「問題と目的」「はじめに」なども可
	方法	研究の妥当性・信頼性の評価ができるように、研究方法を具体的に述べる
	結果	目的と方法に沿って得られた結果を要約し、考察や結論の論拠を示す
	考察	結果の評価と解釈を述べる
	結論	省略可、「まとめ」「要約」なども可
文献		後述の「10.文献リスト」に従い、著者名のアルファベット順に一括する
注		必要な場合は記載する
図表		フォントは明朝体とする。本文頁の右横の空白に、図表等の挿入箇所を指示する
付記、謝辞		論文受理後に追記する

8. **英文抄録**： すべての種類の論文において、ネイティブ・スピーカーのチェックを受けた英文抄録をつける。

9. **本文中での文献記載**： 本文中での文献の記載は、著者・出版年方式とする。

例） …が指摘された（安西, 2015）. 鈴木ほか (2006)は…. 後藤・山本 (2003) によれば….

例） …が指摘された (Arai et al., 2013). Lloyd et al. (2008a, 2008b) による一連の研究では….

10. **文献リスト**： 著者名のアルファベット順に並べ、本文の後に一括する。雑誌名は和洋ともに略記しない。

例） 西脇雅人・木内敦詞・中村友浩（2014）大学体育授業時間内における身体活動量を効果的に増大させる方法の検討：無作為割り付け介入試験. 大学体育学, 11: 21-29.

例） 西田順一（2012）社会的スキル向上を意図した大学体育授業.（橋本公雄・根上 優・飯干 明編著,『未来を拓く大学体育：授業研究の理論と方法』）. 福村出版, pp.56-78.

例） Nakada, M., and Demura, S. (2014) The characteristics and laterality of explosive force exertion of hand grip and toe grip. Advances in Physical Education, 4: 175-180.

※ 巻による通し頁ではなく号ごとの頁が割り振られている雑誌についてのみ、巻（号）表記する。

例） 小林勝法・森田 啓・東海林祐子・木内敦詞（2008）大学体育の教育力. 大学教育学会誌, 30(2): 69-72.

11. **研究参加者の取り扱い**： 人を対象とする研究遂行に際して、そのすべての過程において人権の尊重と安全確保を最優先するために、ヘルシンキ宣言の精神に沿い、人権擁護に配慮した点を論文中に明記する

12. **投稿原稿返却の例**： 以上 1～11 に従わない原稿（本誌の目的に沿わないもの、書式に著しい不備のあるもの）や水準の著しく低い原稿については、本委員会の判断により、審査の前に受け付けない場合がある。

13. **稿原稿の提出方法**： 原稿は、この法人の事務局（info@daitairen.or.jp）宛てに、件名を【大学体育学投稿論文】としたEメールの添付書類として投稿する。その際、以下8項目【①著者名（著者全員）、②所属機関名（著者全員）、③代表著者の氏名・電話番号・e-mailアドレス、④表題、⑤ランニングタイトル、⑥論文の種類、⑦和文抄録、⑧和文キーワード】をEメール本文として同時に送信する。

14. **論文投稿の締切日**： 論文投稿は随時行えるものとする。投稿後、審査を経て論文掲載可（受理）となるまでは、最低3か月を要する。

15. **再提出の期限**： 本委員会より訂正を求められた投稿原稿の提出期限は、訂正通知日から28日以内とする。 また、それを超えた場合は新規投稿原稿として審査を行う。

16. **投稿論文の採否**： 投稿論文の採否、加除訂正の要求、校正（初校は著者）などは本誌編集委員会（以下「本委員会」という）が行い、著者へ連絡する。

17. **論文受理証明書の発行**： 本委員会により掲載承認された受理論文については、著者の希望により論文受理証明書の発行を行う。

18. **論文公刊の時期**： 1月末までに掲載承認された受理論文は、同年3月にこのホームページ上でPDFファイルとして公開される。

19. 投稿料および掲載料： 著者全員がこの法人会員の場合は、投稿料・掲載料ともに無料とする。著者に非会員が含まれる場合は論文1編につき1万円の投稿料を、掲載料については刷り上がり1頁あたり3千円を、投稿者が負担する。表1に示す制限頁数超過の場合は、会員・非会員を問わず、1頁につき3千円を投稿者が負担する。なお、本誌では、会員校の大学院生を会員と同様の扱いとする。

20. **論文の著作権**： 本誌に掲載された論文の著作権の一切（著作権法第27条及び第28条の権利を含む）は、この法人に帰属または譲渡されるものとする。ただし、論文の内容に関する責任は当該論文の著者が負

う。

21. **本規定の改廃**： 常務理事会にて行う。

附 則

本規定は、平成15年6月14日より適用する。

本規定は、平成18年4月1日より適用する。

本規定は、平成20年9月19日より適用する。

本規定は、平成24年2月6日より適用する。

本規定は、平成25年7月26日より適用する。

本規定は、平成27年5月29日より適用する。

本規定は、平成29年2月21日より適用する。

第6回 大学体育研究フォーラム
プログラム・抄録集

2018（平成30）年2月21日 発行

発行： 公益社団法人全国大学体育連合（JAUPES）

編集： 実行委員長　本間玖美子
抄録集担当　中山正剛

Printed in Japan